

# 小学校国語教科書の中の「田中正造」

幾 田 伸 司

## 1. はじめに

田中正造（1841 - 1913）の生涯を題材とした伝記教材「田中正造」は、教育出版、光村図書の1977（昭和52）年度版小学校国語教科書において、6年生教材としてはじめて採録された。教出版の著者は来栖良夫、光村版の著者は上笙一郎で、両編とも書き下ろし教材である<sup>(註1)</sup>。以後、「田中正造」は、光村図書では1991（平成3）年度までの15年間、教育出版では2010（平成22）年度までの34年間にわたって採録されてきた。この間、教出版では1986（昭和61）年度版で一部改訂が、光村版でも1986年度版で挿話の増補を含む改訂が施されている。

「田中正造」が採録された1977年度の小学校教科書は五社固定期<sup>(註2)</sup>に入っており、伝記教材の採録は3年生以上で各学年1編程度、複数の出版社が同じ人物を採録することも少ない状況であった。その中で同年度に2社が「田中正造」を採録したことは、この時期にこの人物を教科書で取り上げるべき何らかの要因があったことを示唆している。また、伝記教材は短期採録で差し替えられることが相対的に多いが、「田中正造」は2社ともに長期にわたって採録が継続した。このことは、この教材で扱われる教育内容、及び田中正造を通じて提示されている規範的人物像が、多年にわたって肯定的に受容されてきたことを示唆する。

そこで本稿では「田中正造」を取り上げ、その採録に働いた要因について考察を行う。また、長期にわたって教材価値が認められ続けた被伝者の人物像がどのようなものであり、それが教材においてどのように形成されているかについて、検討する。

## 2. 田中正造の社会的評価

伝記教材の採録に際しては、被伝者の社会的評価が要因として働くことが想定される。そこで、「田中正造」が採録された1970年ごろまでの彼の評価を検討しておきたい。

衆議院議員として足尾鉍毒の被害者救済に尽くし、直訴まで行った田中正造は、同時代において決して無名な人物ではなかった。彼の死後、その顕彰は、『義人全集』（全5巻、田中翁遺跡保存会編纂部、1925年）によって始まる。『義人全集』によって、文字通り「義人・田中正造」像が確立され、以後、戦後まで、田中正造に対する社会の一般的評価は、民衆の

ために政府・企業と戦った義人として固定されることとなる。

一方、生前の正造と親交の深かった木下尚江は『田中正造翁』（1921年、新潮社）、『田中正造之生涯』（1928年、国民図書）、『神 人間 自由』（1934年、中央公論社）を刊行し、谷中村入村以後の思想を重視した独自の田中像を提示した。これらの著作は木下の田中理解が基調をなしているとは言え、田中正造のまとまった伝記として、その後の田中正造伝の底本となっている。教材でも、木下の著述をもとにしたリライトがなされている。

戦後初期の田中正造研究の特徴として、小松裕は、「佐倉宗吾の義人像が残存し、そのような視角から正造を顕彰するといった趣が強かった」ことを指摘するとともに、「『亡国』＝敗戦の現実と直面し、『亡国の予言者』としての正造がクローズアップされたこと」、「研究者の多くが、社会主義に立脚して、足尾鉍毒反対闘争と正造の闘いを、プロレタリア階級が未成立の段階における孤立的局地的闘争と位置づけ、社会主義運動が本格化するまでの《かけはし》と評価したこと」（小松（2001）pp.20-21）を挙げている。小松の把握によれば、その後1960年代では、「政治的反動化の動きの強まりと同時に、田中正造の民主主義思想に新たな光があてられ、思想家としての田中正造がクローズアップされていくとともに、反公害闘争の先駆者として位置づけられることが多くなった」（小松（2001）p.24）。戦後の田中正造の一般的評価は、『義人全集』以来の義人像を根底に残しながら、1960年代に入って「思想家」「反公害闘争の先駆者」としてのとらえ方が提示されたと言えよう。また、この時期には、『思想の科学』が「田中正造歿後五十年を記念して」（1962年6月号）を特集し、田中正造再評価の気運は高まりつつあった<sup>(注3)</sup>。

教材化される直前の1970年代は、公害問題の深刻化とともに田中正造への関心がより高まった時期である。この時期の研究状況として、小松は、「第一に、林竹二による「義人」像、東海林吉郎による「戦略家」像、田村紀雄による「名主的請負主義者」像という、それぞれに个性的かつ明確な田中正造像が提示されたこと」を指摘している。また、研究雑誌の創刊、自治体史における鉍毒事件資料の収録、『田中正造全集』（1977-1980年、岩波書店）の刊行など、「田中正造研究をめぐる資料状況」の整備が急速に進み、「公害問題としての足尾鉍毒事件研究」も進展した（小松（2001）p.27）。

1960年代に始まり、1970年代により高まった公害問題への関心は、「田中正造」を呼び寄せた大きな要因であろう。こうした背景の中で、子ども向け伝記として大石真『たたかいの人』が刊行され、田中正造という人物が子どもたちの目にも届くようになった。

田中正造再評価の気運のもと、1970年代後半に資料の整備が一気に進んだ。ただし、これは教材が採録されたのとはほぼ同時期であり、教材執筆にあたって、これらの資料はまだ参照できる状況ではなかった。この時期に参照できる田中の伝記資料は前述の木下の著作や雨宮義人（1954）などに限られている。2編の教材では造型する人物像に応じて相違が生じてい

るが、同一の底本のもとでリライトがなされているため、叙述がある程度は類似したものに  
ならざるをえない。こうした状況は、教材執筆に際しての制約になっている。

### 3. 伝記教材の採録状況と「田中正造」

〈表1〉は、「田中正造」が採録された1977年度前後の伝記教材の被伝者の一覧である。

〈表1 1974(昭和49)・1977(昭和52)・1980(昭和55)年度 小学校伝記教材一覧〉

	年	1974年度	1977年度	1980年度
日本書籍	3	銀色のさざ波 (和井内貞行)	くるめがすりの発明 (井上传)	
	4	カール・ハーゲンベック	カール・ハーゲンベック	
	5	ザメンホフ伝	ザメンホフ伝	
	6	米百俵 (小林虎三郎)	北里柴三郎	柳田国男 ことば一つで世界が (ヘレン＝ケラー／言葉)
東京書籍	3	ベンジャミン・フランクリン 牧野富太郎	牧野富太郎	
	4	アンリ＝ファーブル 野口英世と母	アンリ＝ファーブル	アンリ＝ファーブル
	5	フリチョフ＝ナンセン 宮沢賢治	宮沢賢治	サリバン先生との出会い (ヘレン＝ケラー)
	6	ピアノの詩人ショパン	桜 (佐野藤右衛門／事実物語)	
		アメリカへわたる－福沢諭吉の 自伝から	アメリカへわたる－福沢諭吉の 自伝から	
	学校図書	3	小さいころのファーブル アロンのつえ(ヘレン＝ケラー)	小さいころのファーブル
4		山にささげた一生(志鷹光次郎)	山にささげた一生(志鷹光次郎)	山にささげた一生(志鷹光次郎)
5		ジョン万次郎	川上善兵衛	ジョン万次郎
6		キュリー夫人	キュリー夫人	ナンセン
教育出版	3	小さい時のエジソン	小さい時のエジソン	
	4	谷間にかかったにじの橋 (布田 保之助)	谷間にかかったにじの橋 (布田 保之助)	谷間にかかったにじの橋 (布田 保之助)
	5	福沢諭吉	キュリー夫人	キュリー夫人
	6	キュリー夫人	田中正造	田中正造
光村図書	3	子どものころのファーブル	子どものころのファーブル	
	4	山田耕筰	山田耕筰	
	5	赤十字の父 アンリー・デュナン	赤十字の父 アンリー・デュナン	赤十字の父 アンリー・デュナン
	6	福沢諭吉	田中正造	田中正造

\*斜体字は、教材のジャンルが「伝記」とされていない教材

教材化された人物は、学者（北里柴三郎・牧野富太郎・ファールブル・キュリー夫人）、芸術家（宮沢賢治・山田耕筰）などの文化人、民衆のために社会や文化の改善に尽力した社会事業家（ザメンホフ・川上善兵衛・デュナン）、民衆文化の担い手（井上伝・ハーゲンベック・志鷹光次郎）に集中している。「田中正造」は、この中では社会事業家の系列に属する。

この時期の被伝者の傾向は、歴史上の偉人から民衆の生活に近い人物へと移りつつあり、田中の採録にもそうした傾向は反映している。ただし、政治家の伝記は非常に少なく、また結末がハッピーエンドで終わらない点では、田中正造の教材化は異色のものとなっている。

「田中正造」の採録にあたっては、教出・光村の両社ともに「福沢諭吉」と差し替えられた。光村版は直接の交代であり、教出版では「田中正造」の採録によってそれまで6年生で採録されていた「キュリー夫人」が5年生に押し出され、5年生教材であった「福沢諭吉」が消える形となっている。「福沢諭吉」は昭和40年代までの伝記教材として最も多くの教科書に採録された被伝者であり、戦後小学校伝記教材を代表する人物であった。この人物と交代する形で、「田中正造」は教科書に登場したのである。これは、戦後の小学校教科書の題材が積極的に近代化を推奨してきたことからの方向転換の一例であると考えられる<sup>(註4)</sup>。いうまでもなく、福沢諭吉は明治近代化を主導した思想家の代表であり、彼の退場は、経済復興や工業化を重視した近代化が破綻を迎えている時代状況の反映であると言えよう。この時期に社会問題化していた公害は、近代社会の暗部の象徴である。その先駆けとされる足尾鉍毒事件と深く関わった田中正造は、教科書教材が近代化に対する批判的な言説も取り入れようとしたこととともに、採録されたと言える<sup>(註5)</sup>。

#### 4. 「田中正造」の採録にかかわる要因

##### 4. 1 採録にかかわる指導書の記述

1977年度の各教科書の指導書における「田中正造」の記述は、〈表2〉の通りである。

両教材とも、単元の目標として、人物の生き方を読み取り、人間の生き方について考えることができるようにすることが設定されている。これは伝記教材一般についての指導目標とも重なり、被伝者の「生き方」を受容することを通じて学習者個々の生き方観を豊かにすることが企図されているのである。その上で、正造の生き方を「自分の生活や意見と比べながら読む」ことが、6年生段階における目標として設定される。

また、被伝者の生き方を時代背景と関連させて意味づけることが、教出版では単元の目標に、光村版では単元の趣旨に設定されている。6年生段階で伝記指導を通じてつけたい読解力として、人物の言動を状況と関連づけて理解する力が指定されている。

一方、鉍毒問題についての扱いは両教材で温度差が見られる。教出版では、現代の公害問

〈表2 1977（昭和52）年度版指導書における「田中正造」の単元目標と単元の特徴・趣旨〉

	教育出版『新版国語6年 教師用指導書』	光村図書『小学新国語6 学習指導書』
単元 の 目 標	<p>◎ 伝記に出てくる人物の生き方を、時代背景の中で正確に読み取り、その人物の信念や生き方について考えを深めることができるようにする。</p> <p>□文章の組み立てや叙述に即して正確に読むこと。</p> <p>□自分の生活や意見と比べながら読むこと。</p> <p>□時代背景を考えながら読むこと。</p> <p>・ 語句の意味を文脈の中でとらえたり、辞典で確かめたりすること。</p> <p>□伝記を選んで読むこと。</p>	<p>○ 伝記を読んで、自分の感じ方、考え方の変化に気づかせるようにする。</p> <p>○ 人物の一筋の生き方を深く読み取り、人間の生き方について考えることができるようにする。</p> <p>○ 世の中のことを考え、自分の生活や意見と比べながら読むことができるようにする。</p>
単元 の 特 色 ・ 単 元 の 趣 旨	<p>単元の特徴</p> <p>1 田中正造（一八四一～一九一三年）は、幕末から明治維新を経て大正の初期までという激動の時代に生きた人であり、歴史の流れに直接かわりながら生きた人である。その生き方を、エピソードをまとめた伝記物語としてではなく、人物の業績を年代順に綴った本格的な伝記として描いており、短いながら生涯史となっている。</p> <p>2 大気や河川、海の汚染などの公害は、人類の生存を脅かす暗い陰となっているが、その半生を、公害第一号といわれる足尾銅山の鉱毒防止のためにささげた正造の伝記は、公害の原因やその除去についても示唆に富み、現代的な教材である。</p> <p>3 社会科の歴史学習で得た知識に助けられながらこの教材を学習することが、逆に歴史学習に豊かなイメージを与えるようになっている。</p>	<p>単元の趣旨</p> <p>○ 社会や人間関係に対する考え方がしだいに深まり始めてきたこの期の児童は、伝記を読む際にも単に個人的な業績を追うだけでなく、時代の慣習や社会制度などとの関連をとらえながら人物の生き方ととらえようとする姿勢が見えてくる。本単元は、一筋の生き方を貫きながら結果は挫折するしかなかった「田中正造」の無念の生涯を取り上げ、歴史を超えて現代に呼びかけ続ける人間の生き方を知り、ひるがえって自分の生き方についても深く考えさせることを意図して設定した。</p> <p>○ 教材は、田中正造の考えが行動となって現れるいきさつを事実即して描き出している。足尾銅山の鉱毒問題に真っ向から立ち向かってから悲惨な死を遂げるまでの晩年の生き方、考え方に焦点が当てられている。事実関係を正確に読みとらせるとともに、田中正造という人物像を生き生きととらえさせていきたい。</p> <p>○ 「鈍牛の壮烈な生涯」の中にも述べられているように、この伝記の主要テーマは田中正造の「生き方」であり、鉱毒問題は素材にすぎない。あくまでも田中正造の思想と行動の統一を読みとること、一筋の正義を貫いて生きた姿を読み取ることに主眼を置くことが大事である。</p>

題とつなげて積極的に取り上げようとする方向性が「単元の特徴」の中で明示されているのに対し、光村版では正造の生き方に主眼が置かれ、鉱毒問題はあくまでも正造の生き方を規定した「素材」として位置づけるべきとされている<sup>(注6)</sup>。これは、同様の趣旨で同じ題材を扱いながら、教出版は社会状況と正造の生き方との関係をより重視し、光村版は田中正造という人物の生き方・考え方のものを重視するという違いを反映している。ただし、光村版でも学習の手引きの中では「3 現代の公害問題と考え合わせながら、田中正造の遺言の意味を考えてみよう。」という課題が設定されており、公害問題を完全に排除しているわけでは

ない。光村版では、学習者にとって切実さがある公害問題を、正造の生き方を理解する一助として活用しようという方向が採られているのである。なお、教出版でも、「田中正造」と公害問題を重ねようとする学習目標は昭和60年度版以降は消えている。公害問題の切実さや現代性が弱まったことが反映されたととらえられよう。

#### 4. 2 教科書の中の「公害問題」

前項では指導書における「公害問題」の扱いについて述べたが、「田中正造」の後半生の思想と行動は、足尾鉾毒事件との関連を抜きにしては語れない。田中正造自身の再評価の過程においても、1960年代以降の公害問題の顕在化が直接的な要因を成していた。教科書が田中正造を取り上げるのであれば、それは教科書における公害問題の扱われ方と関連していると考えられる。そこで、まずこの時期の教科書における公害問題の教材を検討したい。

高度成長期における工業社会化の暗部として、水俣病をはじめとする公害問題が表面化したのは昭和30年代であった。学校教育においては、1968（昭和43）年版小学校学習指導要領で、公害問題は社会科の5年生の指導内容として明記された。社会科教科書では、1960年代後半から公害に関する記述が現れはじめ、「田中正造」が採録された1977年度版教科書『新版標準社会 5年下』（教育出版）では、「工業の発達と公害」という節のもと、11ページにわたる記述がなされている。

小学校国語科教科書でも、1977年度版では公害にかかわる題材を持つ教材がいくつか採録されている。1974～1980年度の教育出版国語教科書での、公害にかかわる記述を持つ教材、及びその差し替えは次の通りであった。

〈表3 1977年度の教育出版国語教科書での「公害」にかかわる教材と、その前後の年度の教材〉

1974年度	1977年度	1980年度
4年下 二 ニュースの記事 (教材：本工事にはいった青函トンネル)	4年上 八 ニュースの記事 (教材：東京の緑はへる一方)	
5年下 十 われた花びん (作文)	5年下 八 <u>新井川をきれいに</u> (作文)	5年下 構成を考えて (作文) (教材：テレビの見方について)
6年上 十一 キュリー夫人 (伝記)	6年下 <u>田中正造</u>	6年下 田中正造

他社の教材や1983年度以降の教材と照らす必要があるが、少なくとも教育出版教科書では、1977年度は公害問題にかかわる教材を積極的に採ろうとしていたといえよう。

## 5 教材の構成と記述の検討

「田中正造」の主題について、教出版指導書では、指導書の「主題」の項に「田中正造という人の生き方そのものが主題である。」(1977年度版)と記述され、光村版では執筆者である上笙一郎の言の中に「この伝記の主要テーマはあくまでも田中正造の〈生き方〉だとされている。これらが示すように、教出版、光村版ともに、教材テキストは正造の人間像を描くことに主題が置かれている。ここで造型され、主題化されている田中正造の「生き方」は、鉱毒被害民のために身命を賭して奔走し、無念の死を遂げる「義民・田中正造」像である。本節では、この「義民・田中正造」像を造型するためにどのようなライトが行われているかを検討するとともに、教材テキストが描く人物像の相違を考察する。

### 5. 1 叙述対象となる期間と採録された挿話

教出版・光村版の両テキストとも、主たる叙述対象となる期間は、鉱毒事件に関する国会での質問から臨終までである。「直訴」をクライマックスとして物語が構成されており、「直訴」以後の谷中村にかかわる十年あまりはエピローグ的に扱われている。被害民のために奔走し、ついに命をかけて「直訴」に及ぶというストーリーは、社会的弱者のために力を尽くし続ける正造の利他的な生き方を強く読者に訴えるものとなっている。

物語の起点となる国会質問は教材によって参照している部分が異なるが、鉱毒被害を訴え、鉱毒防止措置あるいは採鉱停止を求める点では共通する。その後、正造の国会での活動と、政府・鉱山側の不誠実な対応、それにともなって被害が拡大していく状況が示される。第3回上京請願の際に正造が農民を説得した挿話「保木間の誓い」は正造と農民とのつながりの深さや信頼関係が前面化された挿話であり、両テキストともに取り上げている。

「保木間の誓い」から「直訴」までの記述は、教出版が「川俣事件」<sup>(註7)</sup>「亡国演説」を取り上げ、農民たちがいつそう追い詰められていく状況と正造の苦悩を挿話を用いて描いている。一方、光村版ではこれらの挿話が省略されている。農民と正造との関係を重視する教出版と、正造の人物像を重視する光村版との違いが反映していると考えられる。

「直訴」は追い詰められた正造が被害民を救済しようとする姿が読み取れる場面であり、「義民・田中正造」像を象徴する挿話である。物語のクライマックスをなす挿話として両テキストともに詳細に記述されている。二つのテキストの相違点は、教出版が「幸徳秋水への直訴状執筆の依頼」から取り上げて「直訴」の顛末を外部状況をふまえて記述しているのに対し、光村版は「直訴」当日に焦点化し、正造の内面も補充した記述がなされている点である。この相違も、状況と正造との関係を重視するか、正造の内面を重視するかという二つのテキストの相違に対応している。「直訴」以降については、谷中問題に奔走する正造の様子が

描かれ、「遺言」や「遺品」については正造の生き方を象徴する挿話として、両編ともに取り上げられている。

全般的に見て、採録される挿話の選択、及び挿話のつながりによって形成されるストーリーは、両テキストともに類似している。両教材ともに民衆と正造との信頼関係を前面化しながら、民衆のために力を尽くす「義人」としての正造像を造型するように構成されているのである。一方で、社会状況の中で的人物の生き方を中心に描くか、個人の内面を中心に描くかで、テキストによって挿話の選択や記述内容に違いが生じており、それぞれのテキストの個性を出している。

## 5. 2 プロットの相違 —書き出し部—

前項で述べたように、二つの教材は採録される挿話に共通する部分が多く、ストーリーも類似しているが、書き出しの提示の仕方など、物語の構成のされ方は異なっている。本項では、書き出し部を取り上げ、その相違を検討する。

両教材の書き出しの段落は、次の通りである。

教 出	光 村
<p>「わたしは下野の百しょうである。」 田中正造は、自伝の初めをこう書き起こしている。</p>	<p>一八九一年（明治二十四年）の十二月二十五日、日本に国会が開設されて第二回目の議会でのことである。年齢は五十才ぐらい、がっしりとした体つきの男が演壇に立ち、政府への質問演説に熱弁をふるっていた。満場、きちんとした洋服を着た議員ばかりなのに、その男の身に着けているのは、そまつな木綿の着物とはかま。しかも、かみは乱れ放題で、気にかける様子は全くない。</p>

教出版は、「わたしは下野の百しょうである。<sup>(註8)</sup>」という自伝の書き出しから本編が始められ、正造が農民に深く同化していたことが示唆される。この「下野の百しょう」は、正造が谷中村に残るときの記述「村人と生死をともにし、正義をつらぬこうという『下野の百しょう』だけになった。」と呼応し、農民と「生死をともにし、正義をつらぬこう」とした正造の生き方が主題化される。

一方、光村版は第2回国会における質問演説の場面から本編が始められる。「熱弁をふるっていた」、「きちんとした洋服を着た議員ばかりなのに、その男の身に着けているのは、そまつな木綿の着物とはかま<sup>(註9)</sup>。しかも、かみは乱れ放題で、気にかける様子は全くない。」といった描写は、正造の剛毅さや一本気を示唆し、後の物語で展開される正造の性格や生き方を象徴的に示している。

教出版の書き出し部では、正造と農民とのつながりの深さが顕現化し、農民のために尽くした正造の利他的な生き方が強調される。これに対し、光村版の書き出しでは、正造の剛直さといった性質が強調されることとなる。この違いは、二つの教材テキストの後に展開される物語で造型される正造像の重点の置き方と対応している。



### 5. 3 記述の検討(1) - 鉾毒事件以前 -

本項では、鉾毒事件以前の正造の紹介部分についての異なりを検討する。

教出版テキストでは、鉾毒事件にかかわる以前の正造について、領主六角家の役人を訴えて逆に入牢させられたこと(六角事件)、無実の罪で3年もとらえられていたことが述べられる。特に六角事件の記述は、冒頭で示唆された、農民側に立って我が身を顧みず尽くす正義感としての正造の人物像を補強する。そのうえで、正造が自由民権運動に加わって政治に身を投じたことが述べられ、彼の政治的信念が民衆主体であることが無理なく提示されることとなる。

一方、光村版テキストでは彼が元の名の「兼三郎」から「せめて、これから先は正義をつらぬいて生きたいものだ」と考えて「正造」と改名したこと、夜学会を開いたり、新聞を出したりしたことが述べられる。特に改名の理由についての記述は、正義を貫くことを信念とする人物として正造像を造型しており、冒頭で提示された剛直な人物像を補強している。それゆえ、彼が足尾に関わり始めた動機も「そういう正造だから、今、足尾銅山の鉾毒に苦しむ農民たちを見て、だまっていることはできない。」といった形で、彼の気質に求めることが自然な展開として提示されることとなる。しかし、先行する田中正造伝では改名は祖父の名を継いだことと記述されるのみで、その理由を「正義をつらぬいて生きたい」という思いに求めたものは、管見の限り確認できなかった。正造の信念に一貫性を持たせるための、執筆者によるリライトであろう。

足尾にかかわる以前の正造について、教出版では人々のためという利他性が前面化され、光村版では正義を貫くという信念が前面化されるという差異が見られる。これは、冒頭部で示唆される正造の人物像とも対応している。

### 5. 4 記述の検討(2) - 「直訴」 -

「直訴」については、「正造は、死をかくごしたのである。」(教出版)、「かれは、自分の身を捨てることによって、政府や社会が鉾毒問題に真げんに取り組むようになればよいと考えて、じきそを執行した」(光村版)とあるように、自らの死を覚悟して及んだ行為であったという認識は両教材とも共通している<sup>(注10)</sup>。

「直訴」に関する記述の相違は、直訴後の正造の様子に顕著である。教出版テキストでは「しょんぼりと旅館へもどってきた」のだが、光村版テキストでは自身が釈放された理由を「苦笑いとともに」語っている。光村版は、教出版に比べて正造の剛直な性格、失敗や困難にもめげずに前進する果敢さを強調している。ここでの記述も、光村版テキストが描く正造の人物像に対応している。

### 5. 5 記述の検討(3) - 「遺言」 -

「遺言」は、田中正造の願いを端的に描き出す記述であり、教材が描き出してきた正造像をまとめる働きをしている。教材における正造の「遺言」についての記述は次の通りである。

教 出	光 村
被害地の視察に出てたおれた正造が、栃木県吾妻村のある農家へ運びこまれたのは、一九一三年（大正二年）の八月二日である。／「山や河をもとに回復することができれば、正造は死なぬ。それができなければ、正造は山や川とともに滅びる。私を気づかう前に、人の住める土地を取りもどしてくれ。」かけつけた農民たちに語る七十一才の正造の体は、あせにまみれた。	こうして、二十年間も足尾銅山の鉱毒と戦い、つかれ果てた正造は、一九一三年（大正二年）の八月二日、立ち寄った栃木県吾妻村の農家で急にたおれた。そして、心配して集まってきた人々に、正造は、／「わしの命を気づかう代わりに、みんなが心一つにして、鉱毒をなくす運動をもり上げてくれ。このあれ果てた渡良瀬川の流域に、一本でも多く木を植えてくれ。」／と遺言すると、（後略）

「遺言」にまつわる挿話は、木下尚江の『田中正造翁』『田中正造之生涯』には記述されていないが、雨宮義人（1954）に次のような記述がある。

八月十三日、正造は、島田宗三をよんで改まつた口調で言つた。

「先頃、佐野の蘆原源治郎さんにもお話したのだが、正造は、天地と共に活るものである。天地が亡ぶれば、正造も亦滅びざるを得ない。今度此の正造が倒れたのは、即ち、安蘇、足利の山々が、亡びたからだ。日本も到るところ同様だが――。見舞に来て呉れる者が、本当に正造の病気を癒したいと言ふ心があるならば、先づ此の破れた山川を回復することに努むるがよい。さうすれば正造の病気は明日にでも癒るから。取敢へず山川擁護会を作るように、安足の有志に、近藤貞吉さん等に話してくれぬか。」

ここで言葉を切つて、一息ついた。正造の声は低かつた。しかし、最後の意志を後世に遺そうとする力がこめられていた。

「さあ、出来るか、出来ないか。

出来なければ、正造は、安蘇、足利の山川と共に亡びてしまふ。死んだあとで、棺を金銀で飾り、林檎で埋めても、嬉しくない。」（雨宮（1954）pp.376-377）

雨宮の記述と教材の記述を比べると、明らかに異なる点がいくつかある。第一の違いは、雨宮の記述では島田宗三を呼んで行ったはずの遺言が、教材では「かけつけた農民たち」「集まってきた人々」という、複数の人々に対して発せられた言葉となっていることである。最晩年の正造は、谷中問題に背を向けた郷土の人々や鉱毒被害民たちと距離を置き、むしろ不満に思っていた<sup>(註11)</sup>。雨宮の記述でも、正造に後を託されるのは谷中の若者であった島田宗三である。しかし、教材では、後を託されたのは正造にかかわった人々となっている。教材では、正造が民衆とともに生きたことが重視されており、「遺言」の記述においても正造と

民衆とのつながりの深さが強調されるように改稿が施されているのである。第二の違いは、教材テキストでは死期の近い正造が発する「私を気づかう前に」「わしの命を気づかう代わりに」といった内容が、雨宮の記述にはないことである。死の直前においても自己を顧みない言動は、我が身より農民のことを優先する義人としての田中正造像と連動している。

物語の結末部に近い遺言の記述は、義人・田中正造像を完成させるために不可欠の要素である。ここでは、正造の正義や、正造と民衆との連携という主題を強調するために、典拠となる文献の記述にリライトがほどこされている。

## 5. 6 記述の検討(4) - 「遺品」 -

教材の末尾部においては、両テキストともに正造の遺品について記述がなされている。教材の記述は、次の通りである。

教 出	光 村
正造の残していったものは、すげがき一つ、ずだぶくろ一個である。ふくろには、『新約聖書』一冊と、日記三冊、それに鼻紙が少し入っていた。	死後に残された正造の持ち物とっては、すげがきと小さなずだぶくろだけで、そのほかには何一つない。翌晩、身寄りの者が集まってそのずだぶくろを開けてみると、入っていた物は、聖書一冊と日記三冊、それに鼻紙が少しだけであった。

遺品についての記述は木下尚江『田中正造翁』で示され、これ以降は多くの文献に記述されている。正造の不遇で清廉な生涯を象徴する挿話であり、教材では正造の生き方の象徴としてとらえさせる箇所である。

ただし、この記述の教材での意義付けは、当初の木下尚江の意図とは異なっていたと考えられる。「直訴」以後の正造の精神的深化を重視する木下にとって、義民としての田中正造は直訴で終焉を迎えていた。木下は、谷中以後の正造を預言者としてとらえており、「新約聖書」との出会いから得られた宗教的な悟りが、木下がとらえる田中正造の本質であった。それゆえに、木下にとって正造の遺品が示すのは農民のために身を削って奔走し、命も財もなげうった義人・正造像ではあり得ない。木下の文脈でとらえるならば、わずかしかない「遺品」の中に「新約聖書」があったことこそが重要であったと考えられる。

一方、義人として正造を描いてきた教材において「遺品」の記述が示すのは、木下が避けようとした義人としての象徴であり、正造の清廉な生き方の象徴である。民衆のために全霊をかけて働き力尽きた正造の不遇であったが清廉な生き方が「遺品」に収斂しているのであり、その意味で「遺品」によって田中正造の義人としての生涯が完成するとも言える。

「遺品」についての教材の記述は、伝記の執筆において、同じ挿話を取りながら異なる意図が付与されている可能性があることを示している。伝記教材が典拠とするテキストをリライトするとき、典拠が意図しない方向で挿話を取り上げ、意味づけることが可能となる。「遺

品」の場合、執筆者が義人としての田中正造を描こうとするゆえに、「遺品」はその象徴として提示されたのである。

## 6. おわりに

「田中正造」の教材化においては、採録された1977年度という時代の現代的課題として、「公害」をふまえた題材が求められたことが背景となっている。産業社会の発展を肯定的に提示してきた教科書が、そうした産業化の残した傷を問題とせざるを得なくなったときに、「反公害闘争の先駆者」して「田中正造」が登場してきたのである。

長年にわたって採録され続けてきた「田中正造」も、平成23年度版ではついに姿を消した。「公害問題」が社会の関心から後退し、より地球的規模の「環境問題」に包括されていく中で、「公害」が主題化される必然性が薄れたとみなすことができよう。

伝記教材としての「田中正造」は、他人のために我が身を捨てる「義人」像が主題化されており、一つの規範の人間像として学習者に提示されている。本稿では、この主題が教材においてどのように構成されているかを検討した。「義人」像は強い規範力をもって学習者に働きかける。一方で、それが田中正造という人物の矛盾点を隠していることも事実である。典型的には彼は民権主義者であると同時に天皇支持者であった。「義人」という一つの論理が教材全体を規定しがちであるだけに、田中正造を批判的に見る方向から、「田中正造」像を再検討することも求められよう。

### 【引用・参考文献】

- 雨宮義人 (1954) 『田中正造の人と生涯』 茗溪堂
- 幾田伸司 (2008) 「戦後小学校国語教科書における「伝記」の採録に関する考察」、『第115回全国大学国語教育学会福岡大会発表要旨集』、pp.217-220
- 大石 真 (1971 / 1982) 『たたかいの人－田中正造－』 (『大石真児童文学全集 第3巻』ポプラ社)
- 上笙一郎 (1977) 「鈍牛の壮烈な生涯」 (『小学校新国語6 学習指導書』光村図書 pp.202-204)
- 木下尚江 (1921 / 1992) 『田中正造翁』 (『木下尚江全集 第10巻』教文館)
- 木下尚江 (1928) 『田中正造之生涯』 教文館
- 小松 裕 (2001) 『田中正造の近代』現代企画室
- 林 竹二 (1976) 『田中正造の生涯』講談社現代新書

## 【注】

- (1) 教材採録以前に公刊されていた田中正造の少年向け伝記としては『たたかいの人』（大石真、1971年、ポプラ社）があるが、『たたかいの人』と2編の教材は、記述も内容も異なっている。
- (2) 1971（昭和46）年度から1988（昭和63）年度までの期間の小学校国語教科書は、日本書籍、東京書籍、学校図書、教育出版、光村図書の五社からのみ刊行された。
- (3) この時期の田中正造の社会的評価について、林竹二は以下のように述べている。

一九六二年に「思想の科学」が、歿後五十年を記念して、田中正造を特集したときには、田中正造は一般にはほとんど忘れられた人であったが、今日では彼はひどく有名な人物にされてしまった。だが、それは公害問題が喧しくなったおかげで、けっして田中正造がよく知られるようになったわけではない。田中正造は今日でも依然として知られざる人である。田中正造は、小説家や劇作家には好個の題材であるのに、その研究者は乏しい。これはどうしたことだろうか。（林（1976）p.3）

- (4) 幾田（2008）では、1980年代以降の小学校伝記教材の特徴として、「近代社会の矛盾や問題点（公害や環境問題）を扱った教材が採録されること」「被伝者の同時代性が強まり、庶民が主人公として取り上げられ始めたこと」「社会的弱者、または弱者に寄り添った人物が、少ない教材の中で頻繁に登場すること」「作家の伝記が相対的に目立っていること」を挙げている。（幾田（2008）pp.219-220）
- (5) 「田中正造」の特色として、教育出版版指導書では「（前略）公害の原因やその除去についても示唆に富み、現代的な教材である」ことを挙げている。
- (6) 光村版がわざわざ鉍毒問題への深入りを避けるような但し書きをつけたのは、教材執筆者である上笙一郎の次の記述が強く影響していると考えられる。

執筆にあたって苦心したのは、うかうかしていると（足尾鉍毒問題解説教材）になってしまいそうなのを、なんとかして〈人間・田中正造伝〉たらしめることであった。そして、同じことを別の表現で言うにすぎないが、この伝記の主要テーマはあくまでも田中正造の〈生き方〉なのであって、〈鉍毒問題〉はその主要テーマを支える素材なのである。この点を精確に把握したうえで指導していただきたい——と、作者として切望しないではいられない。（上（1977）p.206）

- (7) 光村版では、1986（昭和61）年度の改訂の際に、この挿話に関する記述が追加された。
- (8) 続く段落では、正造が「名主の家に生まれた」ことが記述される。正造は文字通りの意味では「下野の百しょう」でなく、この宣言が正造自身の生き方の表明であることが強調されることとなる。

- (9) 衣服の描写は、「直訴」時の描写「黒い木綿の羽織はかまに、たびはだし」と呼応して、天皇に対する正造の敬意の深さを示す伏線にもなっている。
- (10) 「直訴」については、両教材とも失敗に終わったととらえている。しかし、「直訴」は追い詰められた正造が衝動的にとった最後の手段ではなく、石川半山や幸徳秋水らとともに長期にわたって綿密に計画され実行された事件であったことが、石川の日記の発見によって明らかになっている。正造らの計画は、直訴を遮ろうとして田中が警備の者たちに殺されることによって鉾毒問題への世間の関心を高めようとするものであったようである。その後の世論の盛り上がりを見れば、「直訴」は「失敗」ではなかったことになる。

教材の執筆は石川の日記の発見より前であり、教材の記述は「従来の政府や社会が鉾毒問題に真剣に取り組むことをうったえようとして、義人・田中が命を懸けて実行した最後の手段」という位置づけになっている。「直訴」のとらえ方はテキストの主題につながる部分であり、改訂に際しても変更されていない。

- (11) 死の直前の正造が、直訴以前にかかわった鉾毒被害民をどのように思っていたかについては、木下尚江が次のような挿話を示している。

『岩崎を呼んで、』

との事。

岩崎が来て、背を円くしてウヅくまると、翁は声を励まして。

『お前方、大勢来て居るやうだが、嬉しくも何とも思はねえ。お前方は、田中正造に同情して呉れるか知らねえが、田中正造の事業に同情して来て居るものは、一人も無い。——行って、皆んなに然う言へつ。』

岩崎は、頭を低れたまま、スゴスゴ立つて行つた。(木下尚江(1921 / 1992 p.381)

(いくた しんじ・本学教員)

# 語文と教育

第 25 号

「妖怪」から「精霊」へ

—水木しげるにおけるイメージの転回— …………… 野口哲也 1

唐詩における曹植・丕詩の影響について

—李白の詩を中心にして— …………… 上野裕人 14

高知市方言における温度形容詞の意味論的考察 …………… 橋尾直和 (1)

主体的に物語を読む学習活動をめざして

—〈語り手〉に着目して「こころ」を読む— …………… 杉浦直也 (23)

作文の表現修正を支援する「対話」技法の探究

—カウンセリング技法による分析・考察を中心に—

…………… 吉田茂樹・小林麻里 (33)

小学校国語教科書の中の「田中正造」 …………… 幾田伸司 (48)

平成22年度卒業論文・修士論文題目一覧 …………… 23

彙報 …………… 24

鳴門教育大学国語教育学会

## 編集後記

『語文と教育』第二十五号をお届けいたします。

本号は、国語科教育三編、国文学一編、漢文学一編、国語学一編の計六編構成となりました。多様な分野からのご投稿に深く御礼申し上げます。

言語系コース(国語)では、本年の四月に、国文学(古典文学)担当教員として小島明子先生が着任なさいました。ご専門は中古・中世の物語文学で、昨年には『中世宮廷物語文学の研究―歴史との往還―』(和泉書院)を出版されています。

本学では、平成二十二年三月卒業生の教員就職率が、全国の国立大学(教員養成系大学・学部)の中で第一位となりました。本学のホームページに記事が大きく掲載されていますので、ご覧ください。

教員養成に携わる者にとって、教員に求められる資質とは何か、あるいは

授業を通じて学生たちの力量形成をどのように支援するか、といった問題は、正解のない、しかし常に考え続けなければならぬ大きな課題です。言語系コース(国語)でも、スタッフ間で積極的な意見交換を重ねながら、少しずつ研究やカリキュラムの改善を進めているところです。

三月の東日本大震災は、遠く離れた徳島にも津波が押し寄せました。直接的な被害はなくとも、学校や家族の安全、災害への備え、今自分にできること……さまざまなことを考えさせられる出来事でした。現在もさまざまな形で震災の影響を受けている会員の方もいらつしやるかと思えます。どうぞお健やかに過ごしてください。

この一年も、多くの大学・機関等より本学会宛てに研究資料をご寄贈いただきました。大切に保管し、研究・教育に活用させていただいていることをご報告申し上げますとともに、謹んで御礼申し上げます。(茂木記)

## 語文と教育 第二十五号

平成二十三年八月三十日印刷  
平成二十三年八月三十日発行  
(非売品)

編集人 鳴門教育大学国語教育学会

発行人 鳴門市鳴門町高島字中島七四八

(〒七七二一八五〇二)

鳴門教育大学

言語系コース(国語)内

鳴門教育大学国語教育学会

会長 原 卓 志

印刷所 協徳島印刷センター